

座光寺氏、武田氏の武将として美濃国岐阜で散る

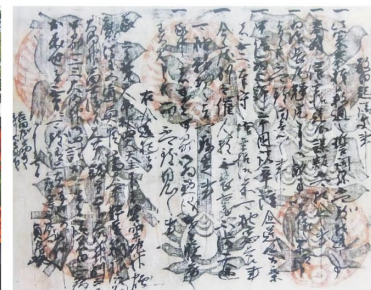
天文23年(1554年)、武田信玄は下伊那に兵を進め、知久氏だけが神之峰城で抵抗しましたが、多くの国衆は武田氏の軍門に下りました。座光寺氏もまた武田氏の配下となり、『甲陽軍鑑』には「座光寺三十騎」と記されています。

①座光寺氏、武田信玄に起請文(誓約書)を提出する

永禄10年(1567)8月、武田信玄は、甲州・信州・西上野の配下の武将237人に対し、信玄に忠誠を誓わせる起請文(上田市の生島足島神社所蔵。国重要文化財)を提出させました。その中に座光寺上野城主の座光寺三郎左衛門尉貞房も起請文を提出しています。「信玄様に対し奉り、逆心謀反など相い企てべからざるの事。長尾輝虎(上杉謙信)を始めとして、御敵方よりいか様の所得をもつて申す旨さうろうとも、同意いたすべからざるの事。」など武田信玄に逆心謀反を起こさないこと、上杉謙信など敵方に通じないことなどを誓っている貴重な史料です。



生島足島神社



座光寺貞房起請文(生島足島神社蔵)

②岩村城籠城戦と和議のあと 織田信長に磔にされた座光寺氏

天正3年(1575)5月、「長篠の戦い」で武田勝頼が織田・徳川連合軍に大敗すると、武田方の東美濃攻略の拠点である岩村城は孤立し、2万の織田軍が攻め寄せました。岩村城主の秋山伯耆守虎繁とその妻(信長の叔母。女城主)、伊那郡の大島氏、座光寺氏等は5か月間に及ぶ籠城戦を続けましたが、ついに降伏勧告を受け入れて城兵一同の助命を条件に降伏しました。ところが、11月21日に秋山虎繁夫妻、大島氏、座光寺氏らが講和の御礼に信長本陣に向いたところ、捕らえられて岐阜城下の長良川河畔にて磔にされ亡くなりました。

この座光寺氏は、開善寺過去帳(天正三年十一月条)に「座光寺三郎左衛門向馬光」との記載(死去)があることから、信長に磔にされて死去した座光寺氏は、「三郎左衛門」つまり、8年前の永禄10年(1567)8月に武田信玄に起請文を提出した座光寺三郎左衛門尉貞房のことと考えられます。この戦いの後、座光寺氏に関する消息は途絶え、座光寺氏は滅亡したと伝えられています。



岩村城跡



長良川と岐阜城



丸に違い鷹羽



諏訪梶の葉

座光寺氏の 謎に迫る



南本城跡

北本城跡

座光寺には、上野城(北本城・南本城)という貴重な中世城郭が残されています。特に南本城跡は、戦国時代の動乱を今に伝える貴重な遺跡として「長野県史跡」に指定されています。では、この北と南に分かれた城はだれが築いたのでしょうか?

昔からこの城は「座光寺氏」による築城と伝えられますが、南本城跡は複雑な縄張り、規模の大きさから、戦国大名クラスの大きな勢力が築城に関わっていたとも考えられています。ところで、この「座光寺氏」とはいかなる一族だったのでしょうか?

座光寺氏に関する史料は少なく、その姿は謎に包まれています。「座光寺」という地名を氏族名としていることから、座光寺の在地領主として、また上野城の城主として、この地に深く関わっていたことは間違いないです。座光寺氏の出自、史料や文書に登場する座光寺氏、そして武田氏の配下として東美濃岩村城に立て籠って織田信長と戦い、和議のあと信長の謀略により岐阜の長良川河畔で磔にされ命を落とした座光寺氏の悲史について紹介し、座光寺氏の謎に迫りたいと思います。



南本城跡鳥瞰図(宮坂武男氏作成)

座光寺氏の出自



① 神氏（ミウシ）〜諏訪氏〜分流説

「神氏」は「ミウシ」と読み、諏訪大社の祭神である建御名方神（タケミナカタノカミ）の後裔とされる古族です。古くより諏訪地域を中心として信濃国各地に勢力を誇った族で、総称して「神氏」と呼んでいます。



諏訪大社上社本宮

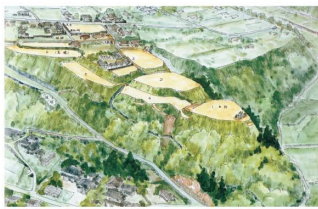
諏訪大社の祭事の中で、最も古く、かつ重要とされる祭事に「神使御頭」がありますが、この祭事の勤仕は「神氏系」の氏族だけに限られており、それ以外の氏族の勤仕は許されなかったそうです。『守矢満実書留』によれば、座光寺氏は、文明3年（1471）から天文11年（1542）まで「神使御頭」を数回にわたり勤仕したことが記録されており、よって座光寺氏が「神氏」つまり諏訪氏の一族であったことがわかります。

③ 鎮西八郎為朝（源為朝）の後裔説

江戸時代、山吹に陣屋を構えた交代寄合旗本の座光寺氏は、自身の出自について「鎮西八郎為朝（源為朝）の後裔。為朝の次男である大島二郎為家が伊豆国大島を去り、伊那郡の下条に居住し、のち同郡の座光寺村に移り、座光寺氏を称したことに始まる」と記しています。鎮西八郎為朝（源為朝）は、平安時代後期の武将で、「弓の名人」として知られており、「保元の乱」では父・源為義とともに崇徳上皇側として平清盛や兄の義朝と戦いましたが、敗れて伊豆大島に流されました。



鎮西八郎為朝



山吹城跡鳥瞰図（宮坂武男氏作成）

史料や文書に登場する座光寺氏

①『信州大塔軍記』 応永7年（1400）

応永7年（1400年）9月、守護小笠原長秀と北信濃の国人連合及び大文字・揆との間に「大塔合戦」が勃発し、守護方が惨敗しました。この合戦に守護小笠原長秀に従って出陣した「郡戸の人々」の中に「松岡次郎・牛牧・飯沼六郎・同黒田孫次郎・座光寺河内守・吉田弾正忠・竜口次郎・知久佐渡守」等の名前が見られます。



松岡城跡鳥瞰図（宮坂武男氏作成）



松岡城跡

すれば、座光寺氏の家紋は、「諏訪梶の葉」など諏訪氏が使用した梶紋系統であったことが考えられます。



② 片切氏（清和源氏・信濃源氏）の分流説

平安時代末、源経基（清和源氏の祖）の五男・源満快のひ孫である源為公が信濃に土着し勢力を伸ばしますが、為公の子である源為基は、伊那郡の所領を継承し、片切郷に本拠を移して船山城を築きます。片切氏は、大嶋氏・名子氏、飯島氏、赤須氏、上穂氏の「族を分派し、彼らを総称して「春近衆」と呼びます。



片切氏発祥之地（中川村片桐）

江戸時代に書かれた史書『信陽城主得替記』に記載されている「片切・大島氏系図」によれば、船山城主片切為信の庶子である片切重度が座光寺氏の家督を相続したと記されており、片切氏系の座光寺氏が上野に居城を築き、以後代々居城したと考えられます。片切氏の家紋は、「丸に違い鷹羽」であり、上野城主・座光寺氏の出自が片切氏であるとすれば、その家紋は同じ「丸に違い鷹羽」と考えられます。

②「関川家文書」 応永22年（1415）

高森町の「関川家文書」には、松岡氏の記録として「応永年中座光寺氏と合戦。留守居なしに百式十騎をだす。他に瑠璃寺十騎、松源寺五騎、安養寺五騎、大嶋十騎、片切十騎、飯島十騎、上穂十騎、赤須三郎十騎。合百九十騎。応永二十二年二月廿日卯ノ刻より相戦い終に座光寺負け、内縁を以て知久より入手して和睦し、松岡が旗下に属す。」と記されています。松岡氏は、座光寺氏を攻める上で、松岡氏120騎のほかに、瑠璃寺、松源寺、安養寺や片切氏、大嶋氏、飯島氏、上穂氏、赤須氏など「春近五人衆」の加勢を得て座光寺氏との戦いに臨んでいます。松岡氏にとって、また座光寺氏にとっても互いに存亡をかけた戦いであったと言えるでしょう。

この戦いから25年後、永享12年（1440）の「結城合戦」の際に、守護小笠原政康が率いた信濃国内の武士を記した『結城陣番帳』の中に座光寺氏の名前はありません。これは、応永22年の松岡氏と座光寺氏との合戦により、座光寺氏が松岡氏の配下になった影響かもしれない。